

プロローグ

精神科医や臨床心理士は患者が話したことに注意を払うのに対して、精神分析家は患者が話さなかったことに関心を抱く。

自我心理学や発達心理学、認知行動療法においては精神科を受診する患者は自我が弱いのであって、治療とはそれを強化し、社会に適応できるいわば普通のレベルにまで成長させることにあるとするのに対して、ラカン派精神分析では精神科の患者の自我「自己イメージはむしろ強すぎるのであり、その自我によって自分が疎外されているのだと考える。一九五〇・六〇年代、構造主義的精神分析家時代のラカンは「フロイトへ戻れ」のテーゼを掲げ、精神医学や自我心理学ではなく、フロイトの天才によって創出された精神分析実践の原点に立ち返る必要性を一貫して説いた。その中でラカンがとりわけ強調したことが二つある。

まず一つ目は、患者の話す言葉に細心の注意を払えということである。操作的診断DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 精神障害の診断・統計マニュアル) に象徴される

ような現在流行の生物学的精神医学においては、人格障害や発達障害を初めとして〇〇障害という診断名が付けられるのが常であるが、この障害という言葉は行動主義心理学に由来している。一九五〇年代は行動主義心理学が精神科臨床の場面で応用され始めた時期でもあり、ラカンは冒頭のテーゼ（フロイトへ戻れ）によって、行動面から患者の病態を把握していこうとする方法論に対して警鐘を鳴らしたのである。行動主義心理学においては動物と人間を分かち最たるものである言語という要素が排除されているが故に、最終的には精神科の患者と動物が同列に扱われることになりかねない事態をラカンは当時から憂慮していた。

それから半世紀が経過した精神科臨床（特に、USA、イギリス、日本）の現状はどうであろうか。精神科医や精神医学者たちの関心は、患者の病歴やその発する言葉ではなく、動物種一般の脳に集中している。彼らも人間の脳と他の動物種の脳を同列に扱っているわけではないのである。が、しかしこの発想からは患者一人一人の個性という概念は完全に排除されている。なぜなら精神医学者達がA氏の脳、B氏の脳などと一々区別しながら人間の脳の研究は行わないからである。これに対してラカン派精神分析は、人間の脳ではなく、一人一人の患者の言葉、声量、抑揚などを手掛かりにして各人の歴史の再構成を目指す。ラカンの理論は、決して紙と鉛筆と彼の脳によってのみ生み出された、いわば他者の排除された自閉症的な成り立ちでは決してない。彼は患者との間の言語を介した転移関係を軸に据えて、精神分析の言説を構築していったのである。

冒頭のテーゼの意図するものの二番目は、エディプス・コンプレックスや去勢の概念を精神分析理論の要として再認識しなければならない、ということである。

ラカンによると、フロイト理論におけるエディプスや去勢の概念において重要なことは、母と子の近親相姦的二者関係、前エディプス関係において母の欲望に対して従属している子供をそこから解放し、他者に対して理解可能な言語を語る社会的主体として生成させ、異性愛を可能にすると同時に、現実感を与えるファルス機能、を授ける父の機能である。翻って見ると、あまたの精神分析理論においてこの父の機能を強調しているのは、確かにフロイトとラカンのみである。他の学派においては、父ではなく子に愛情を惜しみなく注ぐ母にその注意は集中する。これに呼応するようにそれらの精神分析実践においては、分析家と患者の転移→逆転移関係という二者関係の議論に終始するが、この原型は母と子の二者関係にある。

エディプス・コンプレックスや去勢概念に拒絶反応（去勢の否認という倒錯的反応であるように思われる）を起し、欧米諸国と比較して母子関係がより濃密である甘え社会の本邦においては、当然予想されるようにフロイトやラカンの理論ではなく、転移→逆転移理論が主流であった。実際にラカンも言っているように、フロイトのエディプス理論は、ユダヤキリスト教の一神教の伝統を持つ社会において最も妥当し、それ以外の文化圏においては等しくその価値を持つ普遍的なものとは限らないと言っているわけであるから、本邦での上記の反応は理のないことでもない。しかし程度の差こそあれ、子を母の欲望に対する従属関係から解放し、社会的主体へと変貌を遂げさせる手助けをする父の機能の重要性が日本において失墜する訳がない。

本書では、ポストモダン、すなわち西洋社会において父なるものの權威の失墜が決定的となりつつあった一九七〇年代にラカンが、父の機能を保持しながらエディプス理論に代わって新たに創出

したボロメオ理論について重点的に解説を行うが、これこそが日本における精神分析を考える上で極めて示唆に富む理論であると筆者は確信する。

本書は、ラカンが一九七六年二月にサンタンヌ病院の病者提示において出会ったジェラールという二六歳の男性患者の診察記録とその解説を軸に展開していく。病者提示とは、シャルコー以来のフランス精神医学界の伝統で、事前登録した参加者（必ずしも臨床家ばかりとは限らない）を前にして、精神科医師が行う公開診察のことを指す。

ラカンは一九四一年、四〇歳の時に精神分析のキャビネを個人開業して以来、精神病院での勤務歴はない。しかし、一九五〇年代から一九八一年に彼が亡くなる直前まで行われていた、あの有名なセミナーと平行して行われてきたのが、パリ・サンタンヌ病院における病者提示であった。その診察は一回きりのものであるために、通常の精神分析のセッションとは異なり転移の問題を扱うことはできない。しかし、フロイトがその精神分析理論の対象として主に神経症者を扱ったのに対して、ラカンはさらに精神病をも射程に入れて実践を行い、理論を構築していった。その意味で、神経症的構造を持ちかつ精神分析家になりたいという欲望を持った人々が多く集まってくるキャビネとは異なり、より重症の精神病の患者が多く入院している精神病院で病者提示を定期的に行うラカンが行ってきたことが、彼の理論形成に重要な影響を与えてきたということは容易に理解されよう。

本書で紹介するジェラールの症例はまさにその好例であり、ラカンが行った精神分析及び病者提示のうち唯一記録が残っている極めて貴重な事例でもある。さらに、一九七〇年代のいわばポスト

モダンのうねりの中、ラカンはそれまで展開してきたエディプス・コンプレックスや去勢概念、父やファルス機能を中心に据えた構造主義的精神分析、フロイト的精神分析から、位相幾何学的精神分析、ラカンの精神分析へとシフトしていくが、ジェラールの症例はそのまさに節目に位置し、当時のラカンが理論の創造を進めていく上での重要な発想源となっていたことが、本書を読み終わるころには理解されていることであろう。

本書は全四幕から成る。

第一幕では、患者ジェラールのそれまでの生い立ちと病歴を紹介したのち、約一時間に渡るラカンによる患者のインタビュー記録の翻訳を掲載している。第二幕では、その対話および本書全体を理解する上で必要不可欠なラカン理論の解説を行い、第三幕では、第一幕で見たラカンの患者への介入の意図や、精神分析的解釈の解説を行っている。最後に第四幕では、現実感の喪失に着目しながら、現代におけるラカン派のトピックス——普通精神病と自閉症——について述べた。この二つの事例においてはいずれも、こだわりという症状が目立つが、その成り立ちは全く異なる。一九七〇年代の症例ジェラールの延長線上にある普通精神病と、自閉症の違いを理解することで、本書が現代の、特に本邦におけるラカン派精神分析実践を考える上で重要な意味を持ちうることを把握されるであろう。

患者の発する言葉のみに着目し、その人生を扱うことに妥協のない人生を送ったラカン。そのラカンにとって、ジェラールの人生はどのように映ったであろうか？ そろそろ、開演の時である。